

今になれば可笑しいことで、ほんの気休めにしかならないのだが横倒しにした弾の上からさらに土をかぶせておいた。これは人間の生きる業みたいなもので、少しでも被害をすくなくしようとしたわけだ。

あれが爆発すれば入口をふさがれた壕の中では爆風の抜けるところがなく、われわれは木っ端みじんにならただろう。幸にも爆発を一人で、積極的に回避したことになる。いま考えればこれも運命の境目にながらわれわれはツキを呼び寄せたのだと思つ。

### 食糧探し

不発弾の処理に成功したそれからは、すきつ腹を抱えて食糧探しがはじまつた。

空腹感に悩まされたのは、最初の一週間くらいで、あとは腹もあきらめたのか、それとも麻痺したのかさほど感じなくなつてきた。

非常食の備蓄してあつた場所は、私の方が知っているつもりだったが、見当をつけては犬のように土を手でほじくり返したが、なかなか出てこなかった。前日の猛爆撃で壕の天井や壁の土がはげしく崩れ落ちていて、記憶していた位置とすいぶんちがうのだ。やっと出てきたのは業務用の缶詰みかんの缶詰もあつたがもしれない。牛の切り身を食ひのばすでもなくパクついていたので、数日で缶詰はなくなつてしまつた。

水は天井から落ちる滴を手当てて見当をつけ、その下へ空缶を置いて溜めては飲んだ。最初の空缶に滴がカンカンと当たる音が、もしかすると近くに居る敵兵に感じられるのではないかと、非常に気になつた。しかもこの水がきれいなのか汚い水なのかは、真つ暗がりでは確かめようがない。

飲みたいときには、缶に指を突っ込んでどのくらい溜まつたかを確かめ、自分だけ先に飲んだりしないで、「おいたまつたぞ」と教えあつた。お互いが暗黙のうちになんでも公平に分けあおうと心がけていた。

## 梅干し

空の腹をかかえ、暇にまかせて始終土を掘っていた。そのうち木杵が手にあつた。おや、なんだこれは？と二人で夢中になつて土を掘り返した。樽らしいが中はなんだ？とにかく食い物ならなんでもいいと、まるで餓鬼同然であつた。

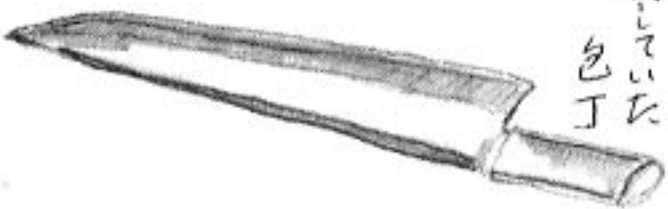
醤油の一斗樽だつた。直系三十センチ、高さ四十センチぐらゐの樽。醤油？まさかこんなところに醤油を入れておくはずがない。醤油の匂いもしない。揺すつても音もしない。

さて、開けるのがまた一苦労だつた。われわれは武器をなにも持っていないのだ。

ただ私は従兵だつたので、専用につつも洋刀の刃渡り一尺二寸(約三十六センチ)の肉切り包丁をもち歩いてゐた。軍隊の包丁は研げば本当によく切れるいいものだつた。缶詰も上を十文字にこれで切つた。この包丁があつたお陰ですいぶん重宝しくわれわれの命を救つてくれた守り刀のようでもあつた。

樽の中には一体なにが入つてゐるのだらうと、気は急ぐが附近の敵に悟られそうなので大きな音を立てるわけにはいかず、交替で樽の前に座り込み、まるで彫刻でもするかのよつな格好で数時間かけ、密閉した丸い木のほぞを包丁の先でほじくつて、こじあけた。

あいたとたん酸っぱい匂いが鼻をついた。梅干しの樽だつた。すいすいものを見つけたと、いつか感激まなくこいつに緊急時に梅干しはすこしは役に立つが、こんなに梅干しばかりでははすくへ飽きてしまふ。最初はかえつて落胆した。しかし、いま考えよ。ほかのどんな食べ物より、殺菌力のある梅干しだつたからこそ、生き延びることができたのかもしれないのだ。しばらく樽を眺めていたが空腹には勝てず、二本のゆびを、開いたほぞ穴に突っ込んで、は摘みだしてこたがす。指がとどかなくなつた。



所持していた  
包丁

梅干の入っていた一斗樽



話し合ってたきめた  
一食分の梅干

外への音漏れに気をつけながら、交替で樽の上ぶたに包丁できずを付け削り、ちと板を剥がした。

はじめは無制限に食べていた。種も自分の座っている辺り一面にぷんぷんと吐き出していた。樽に梅干しが半分ぐらいになったとき、お互いに自分勝手に食べ続けていたのではなくなってしまう危険を感じた。いまは「唯一、貴重な食糧を食いのばすため」おたがいがお互いを監視していくこととした。梅干しは一回に五個を、宮川の分は私が数えて渡し、私の分は宮川から貰うことに決めた。お互いに欲望に負けて食べないように誓った。

排便は梅干しを少々しか食べていないので、記憶にないほど少なかった。出したいときは、不発弾を埋めた側とは逆の方へ行って穴を掘り、犬のように土をかけて始末をした。

# 第五回

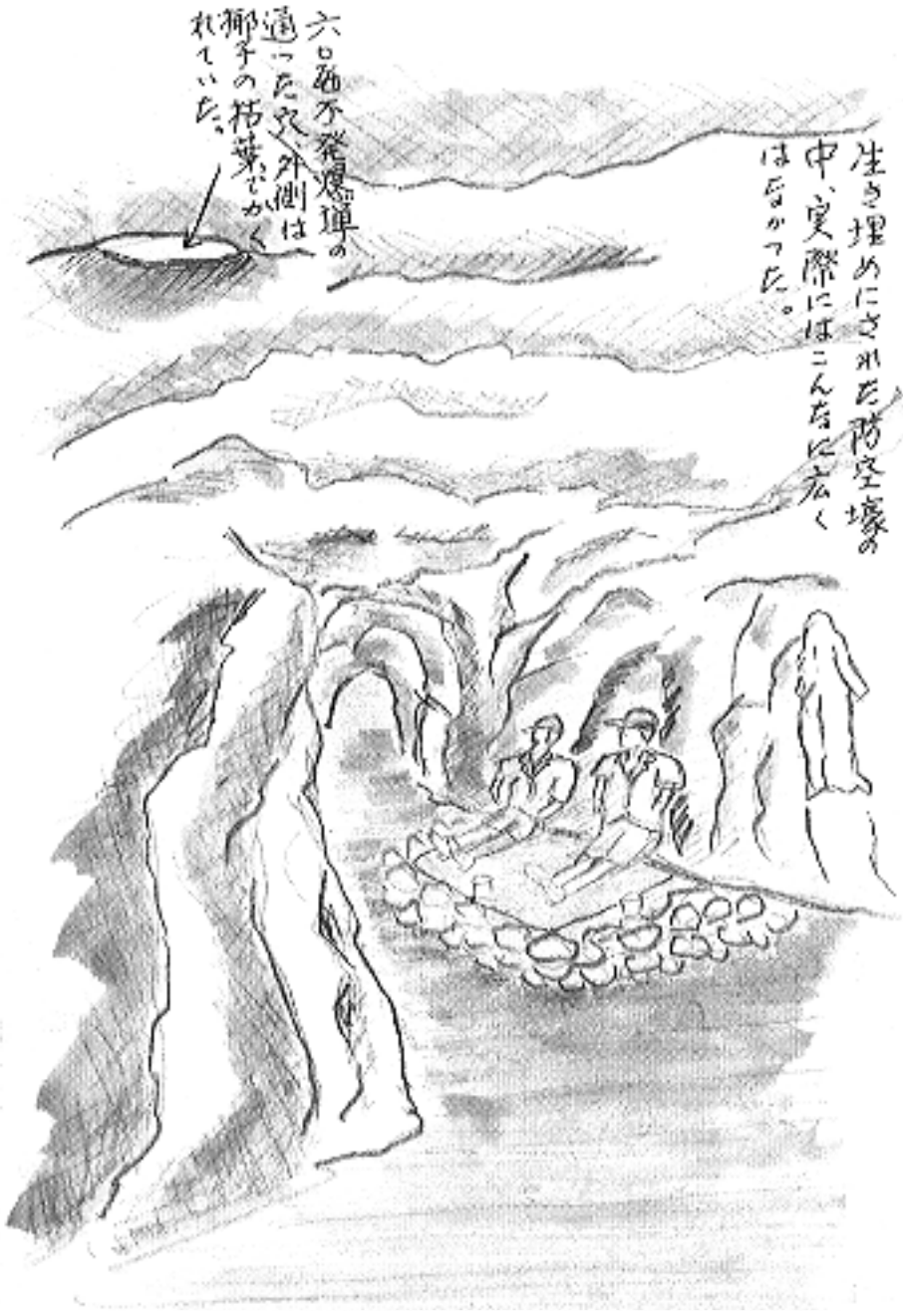
お互いが人という字になって

この洞穴のような場所は、入口がふさがってから排水されず、地下水なのか雨水なのかかわからないが、天井や壁を伝って水が常にしたり落ち、赤土の上を水浸しにしていた。

自分たちがいる場所は半畳あるかなしかの広さに、まず石を敷き詰め、その上に乾いた土を運んできては相撲の土俵のように盛り上げた。土が水分を吸ってじめつくと、毎日乾いた土を探してきては盛り上げる作業を二人とも日課にした。この土の上に島中尉が残っていた外套と毛布二枚を敷き、二人が横になる広さはないので、お互いが互いの背中に寄りかかって寝た。文字どおり二人で一つの人という形をつくり、身を寄せ合って異常な事態をひそかにしのいでいた。

生き埋めにされた防空壕の中、実際には二人になんかほらかった。

六日砲不发煙煙の  
通った穴、外側は  
獅子の枯葉でかく  
れていた。



私は三等兵、本来なら六か月たてば二等兵になる。しかしこんな激戦下では日本から通知が届くわけがなかった。とはいえ宮川は二階級上の一等兵である。軍隊といつてころは階級が絶対ものをいうところ。この階級差があつたからかも知れないが、宮川とはほとんど言つてよいほど必要なこと以外、故郷のことや私事を話さなかつた。むしろ外の敵がそばに来ていそつな気がして、話し声も極力さけるようにしていた。

日本軍は負け知らずの軍隊とはいつても、もしわれわれを助け出せない位置にいたなら、この二つの小島は敵ばかりで、ここを何時どんなときどんな風にして捕まらずに脱出できるか。そのため外の物音には極度に耳をそばだてていた。敵の弾に当たるより、捕虜のはずかしめだけは決して受けたくないと思つていた。この暗く長い穴ぐら生活の中では数週間たつうちに、序列、階級はさておき、お互いがお互いが必要とし、頼りにするようになっていった。何をすることも相談しあつた。やはり一人ではどうして生き延びることとはできなかつたと思う。

## 天井は敵の通信中継基地

日には天井穴のつまりりから判断して約一か月たつた頃、われわれ二人の悪い予感的中する事態が起きた。

われわれの寝ている昼間、二人の頭の上をのぼっていく数十人の足音で飛び起きた。壁に耳をあてると、敵兵が壕の上に器材を運び上げている様子だ。そのうち階段まで出来たらしく、足音がトントントンとリズムカルに聞こえてきたのには肝を潰した。

暫くすると、今度は天井穴の近くから八口八口と話したり、チリンチリンと電話を掛けたり、掛かってくるような音が聞こえ始めた。われわれには英語は理解できなかつたが、なにか言葉を反復しているように聞こえてきた。これは後になって考えたことだが、爆撃でガブツ島とタナンボコ島を繋ぐ栈橋は破壊されていたし、向い側のフロリダ島には敵の水戦基地があり、これらをつなぐ通信の中継基地を造つていたらしい。

最悪の事態だ。向い側の音がこれだけ大きく聞こえるといつては、逆にこちら側の物音

もちよつと耳をすませば聞こえるにちがいないと自分たちの立てる音にはいさゝかから神経質になつた。暗い中では手まねや表情では意志が通じず、こつこつと話したい時は相手の肩をたたき、耳へ口をつけて内緒話のしくさをした。

われわれの命の水、天井から落ちる滴はカラの缶に受ける最初のカンカンと響く音を少しでも消そうと、最後にのんだ者が少し残しておいた上に受けるようにした。

われわれが水溜まりをビチャビチャと歩き回つては向かうに聞こえてしまつたさうと、敵が活動する昼間はこちらの行動をビツタリやめて寝ることにした。

敵の通信士は二時間おきぐらゐに交替するのも分かつた。

暫く音がしなくなると夜がきたなと、今度はこちらが行動開始。日課の自分たちのいる場所に乾いていそいな土盛りを始め、終ると梅干し樽の底に沈む残り汁を指につけてなめ、終には塩気を爪で引つ揃いてなめ尽くし、全くの空っぽになつた。

つづく

第六回は一月十二日(火)の予定